

演題名:「介護者の集い」がもたらす介護者への影響 ～参加者のアンケート調査をもとに～

所属:美作大学 生活科学部 社会福祉学科 4年

氏名:土方亮弥・大草信康・徳橋孝浩・岡咲衣・山本華乃・富谷美希



研究背景・目的

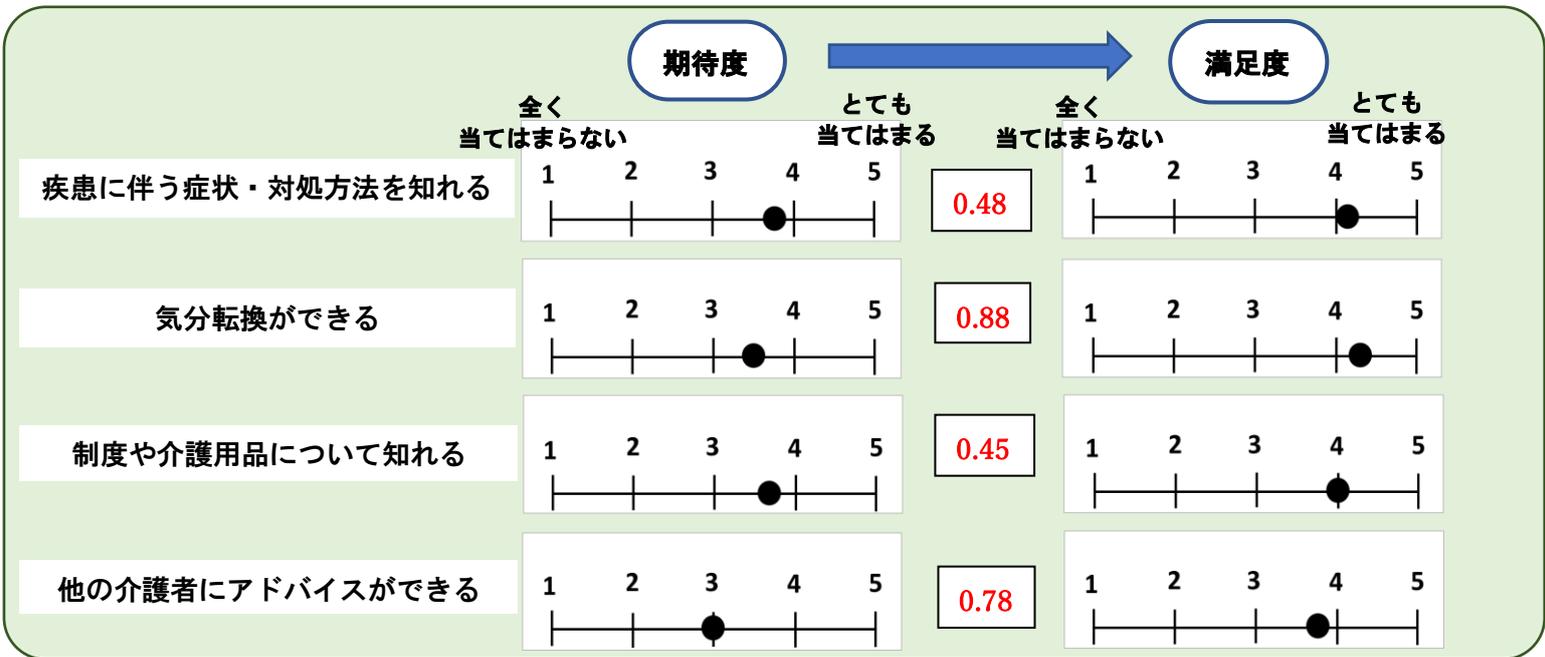
要介護者を介護する場が、施設から在宅へ移行する中で家族介護者の役割が大きくなっており、専門的な支援だけでは家族のニーズに対応することは困難である。このような状況において、家族介護者を支援するインフォーマルな社会資源として注目を集めているのが、介護者の集いであり、現在、家族の会は増加傾向にある。介護者の集いが当事者にもたらす影響を把握するため、介護者自身のネットワークの広がりや心境の変化について調査し、情報の壁と孤立感の軽減を図る。

方法

中四国圏域の介護者の集い 15 か所中 8 か所の同意を得て、郵送による自記式調査を実施した。

結果

回答者の基礎データ 回収率 64.6% (130 通郵送中、84 通回収)
 回答者年代:71.1 歳 要介護者年代:82.2 歳
 介護年数:7.4 年 続柄:1 位→配偶者 2 位→母親
 参加年数:6.3 年 要介護度:1 位→要介護 4 2 位→要介護 1・5



- ◇会の魅力
 - 79% 情報共有をする場である
 - 69% 自分の悩みを聞いてもらえる
 - 58% 息抜きができる
- ◇会に参加していなかった理由
 - 73% このような会があることを知らなかった
 - 15% 介護や仕事が忙しかった
 - 14% 必要性を感じなかった
- ◇会に参加したきっかけ
 - 45% 友人・知人
 - 24% 専門職
 - ケアマネジャー(うち 50%)

男性介護者に着目すると・・・
「他に心の拠り所があった」:0 人

考察・まとめ

調査結果より、参加前では、介護者として情報を得ることへの期待が高かったが、参加後は、介護者が自らの生活にも目を向けるという変化が見られた。つまり、参加者にとって集いの場とは、お互いの情報を共有する場であるとともに、気分転換ができる場ともなっている。また会に参加したことで、他者に介護方法のみならず、自らの介護経験によって「アドバイスができる」という、新たな役割を得ている。その結果、自己肯定感が向上しているのではないかと考える。

一方で、70%以上の方が、会の開催について「知らなかった」と回答しており、情報の壁があることも表明された。さらに、男性介護者に着目すると、参加していなかった理由として、「他に心の拠り所があった」と回答した人は皆無であり、会につながった要因には、専門職からの情報提供が契機となっていた。男性はもともと、友人・知人との関係が希薄であると推測されることから、自分の悩みを本音で語れる関係性が築きにくいことが示唆される。

専門職は要介護者だけではなく、介護者の生活にも目を向けた支援が必要であり、専門職から介護者の集いにつなぐことは有効な手段のひとつであると考えられる。また、インタビュー調査では、介護者の会のメンバーによる出張茶話会等の活動により高齢の配偶者をひとりで抱える男性が、会へとつながった好事例を聴くことが出来た。以上のことから、今後は、「集いに参加していない人」「集いの情報が行き届いていない人」への方策を検討していく予定である。